

武蔵台緑地  
植生管理ガイドライン  
現状と追加の対応について

令和6年3月  
府中市

#### ◆園緑の緑の特徴

武蔵台緑地では、浅間山などによく似た、コナラやクスギを中心とした雑木林が最も広い面積を占めています。しかし、崖越という地形を反映して、それとは異なる特徴をもった部分もみられます。斜面の下部にはケヤキなどが多く、台地上に一般的な雑木林よりは、山地の深谷林に近い林になっています。一方、崖越の上の平地地では、府中市内では唯一となったアカマツ林もあります。これらは手つかずの自然林ではありませんが、人の利用とのバランスによって、素晴らしい特徴を失うことなく維持されてきました。そのため、武蔵台緑地には市内でここにしかみられない植物や昆虫も多数生育し、地域の「生物多様性のホットスポット」となっています。



ケンボナシ 園緑に特徴的な樹種。



市内で唯一、林床まで残っているアカマツ林。

#### ◆武蔵台緑地の現状

武蔵台緑地では、これまで明確な目標をもった植生管理が行われてきませんでした。そのため、アズマネササ（篠）の密生や常緑樹の増加により遷移が進行し、うっそうとした藪のようになりつつあります。人の利用とのバランスがとれた姿が損なわれた結果、過去30年余りで絶滅したり、数を大きく減らした生き物も多くいます。

こうした変化は、公園利用者の安全確保や景観の面でもふさわしいとは言えません。地域の自然環境と生物多様性を保全し、市民にとっても快適な緑地をつくるためには、武蔵台緑地の特徴を生かした植生管理を行う必要があります。



常緑樹の侵入が著しく、ヤぶ状になった雑木林。



武蔵台緑地から姿を消した植物の例（写真は浅間山）。左：ヤブレガサ、右：リンドウ



#### ◆武蔵台緑地の現状

武蔵台緑地では、これまで明確な目標をもった植生管理が行われてきませんでした。そのため、アズマネササ（篠）の密生や常緑樹の増加により遷移が進行し、うっそうとした藪のようになりつつあります。人の利用とのバランスがとれた姿が損なわれた結果、過去30年余りで絶滅したり、数を大きく減らした生き物も多くいます。

こうした変化は、公園利用者の安全確保や景観の面でもふさわしいとは言えません。地域の自然環境と生物多様性を保全し、市民にとっても快適な緑地をつくるためには、武蔵台緑地の特徴を生かした植生管理を行う必要があります。

武蔵台緑地の植生管理は、当ガイドラインに基づく管理として、令和4年度より委託により実施しています。令和4年度は全面的なササ刈りを中心に実施し、令和5年度は年間を通じた植生管理を行っています。

武蔵台緑地では、次の4つを基本的な方針として保全・管理を行います。いわゆる「美化」や「愛護」ではなく、樹林の生態系を保全することを目的とした活動であることを意識する必要があります。

### 1. 樹林の地形を生かす

樹林の保全には、崖に沿った横方向のつながりや、斜面の上部から下部への縦のつながりを維持することが非常に大切です。地形そのものの改変や、土壌のかく乱（土を掘り返したり、耕したりすること）を避け、場所ごとの植生の違いに応じた管理を行います。

### 2. 遷移\*の進行をおさえる

武蔵台緑地のもっとも大きな問題は、常緑樹の増加やササ類の繁茂です。明るい松林や雑木林であった場所がうっそうとした鬱に変わると、生育できる生き物が限られ、生物多様性は低下します。そのため、常緑樹やササ類の極端な増加を防ぎ、遷移の進行を抑える管理を行います。

\* 遷移：植生が時間とともに移り変わること

### 3. 特定の「種」ではなく樹林を守る

武蔵台緑地には、市内ではここにしか生育しない植物も多いため、それらの生育場所が破壊されないよう留意します。ただし、珍しい植物やきれいな花が咲く植物だけを増殖させることは、生物多様性を豊かにすることになりません。樹林の構成種すべて（外来種を除く）が持続的に生存していくことができる環境を維持することが大切です。

### 4. 持ち出さない、持ち込まない

植物や昆虫をむやみに採取することはもちろん、武蔵台緑地に生育していない植物を他の地域から持ち込んで植えたり、飼育していた昆虫や動物を放したりすることも避けます。武蔵台緑地の「個性」を大切にすることが生物多様性の保全につながります。

## 4. 持ち出さない、持ち込まない

植物や昆虫をむやみに採取することはもちろん、武蔵台緑地に生育していない植物を他の地域から持ち込んで植えたり、飼育していた昆虫や動物を放したりすることも避けます。武蔵台緑地の「個性」を大切にすることが生物多様性の保全につながります。

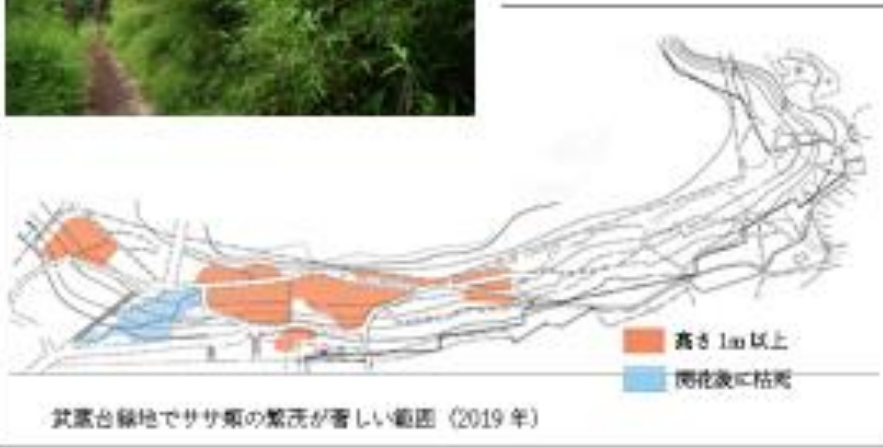
- ・「持ち出さない」について  
カブトムシの幼虫・成虫などをむやみに採っていく人がいる。
- ・「持ち込まない」について  
園芸植物が植えられていたり、土とともに捨てられていたりすることが多い。  
飼育ケースの中身をひっくり返した投棄もあり、昆虫が入ってくる懸念がある。

「持ち出さない」「持ち込まない」については、より広く啓発する必要があります。  
現地に看板を掲出するなど取り組みを強化していきます。

分断されて面積が小さくなった都市の樹林では、アズマネザサ（篠）が繁茂しやすくなります。林床管理が行われず長年放置されると、アズマネザサが人の背丈より大きくなり、密生した藪をつくるようになります。こうなると、若木が育たず森林が更新できなくなるばかりでなく、林内に生育する低木や草本も消失し、多様性が著しく低下します。武蔵台緑地では、アズマネザサのほかにも、ノダケ、アズマザサ、クマザサ（植栽）が生育しており、これらササ類の繁茂を抑えることは、すべてのエリアで重要な管理作業です。



アズマネザサやノダケは放置すると人の背丈より大きくなり、視界をふさぐ藪のようになる。



ササ類は地下茎を伸ばして広がるのと同時に、地下に養分を蓄えるのにもなって、しだいに太い秆（かん）を出すようになります。秆が太く密生している場所はササ類の拡大拠点となっている部分で、種くてもまばらな場所は最近になって侵入してきた部分といえます。いちど密生した状態になったササ類の生育を抑えるのは簡単ではありません。ササ類を増やしたくない場所では、秆が細くてまばらな状態のうち、早めに刈り取りを始めることが必要です。

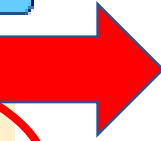
分断されて面積が小さくなった都市の樹林では、アズマネザサ（篠）が繁茂しやすくなります。林床管理が行われず長年放置されると、アズマネザサが人の背丈より大きくなり、密生した藪をつくるようになります。こうなると、若木が育たず森林が更新できなくなるばかりでなく、林内に生育する低木や草本も消失し、多様性が著しく低下します。武蔵台緑地では、アズマネザサのほかにも、ノダケ、アズマザサ、クマザサ（植栽）が生育しており、これらササ類の繁茂を抑えることは、すべてのエリアで重要な管理作業です。

全面的なササ刈りを令和4年度から実施しています。  
繁茂は1 m以内に抑えられています。

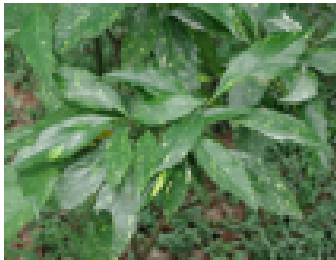
また、鳥類保護のエリアではササ刈りを実施せず、鳥類が身を隠す藪を残しています。

2 常緑樹を取り除く

低木層に常緑樹が増加すると林内が暗くなり、落葉樹の若木や草本が生育しにくくなります。とくに、トウネズミモチ（外来種）やアオキ、シュロなどの増加は、アズマネザサの繁茂とともに樹林の叢化の原因になっています。また、クスノキやユズリハのような高木になるものも増えつつあるため、これらを取り除かないと常緑樹林への遷移が起きます。常緑樹を取り除くことで林内を明るくし、在来の落葉低木の生育を促すとともに、多様な草本種が生育できる環境を維持します。常緑樹の伐採は、高木性樹種では鋸で切れる太さのうちに、低木性樹種では実をつけるサイズに達する前に行うのが効果的です。



低木層に常緑樹が増加すると林内が暗くなり、落葉樹の若木や草本が生育しにくくなります。とくに、トウネズミモチ（外来種）やアオキ、シュロなどの増加は、アズマネザサの繁茂とともに樹林の叢化の原因になっています。また、クスノキやユズリハのような高木になるものも増えつつあるため、これらを取り除かないと常緑樹林への遷移が起きます。常緑樹を取り除くことで林内を明るくし、在来の落葉低木の生育を促すとともに、多様な草本種が生育できる環境を維持します。常緑樹の伐採は、高木性樹種では鋸で切れる太さのうちに、低木性樹種では実をつけるサイズに達する前に行うのが効果的です。



アオキ。運入りのものは明らかに栽培品からの逸出。

人の手が加わらなくなった雑木林や整林が常緑樹林に遷移していくこと自体は、自然に起こる現象です。しかし、武蔵台緑地にみられる常緑樹は、シラカンなど一部を除いて、ほとんどは栽培品が逸出したものです（下表参照）。そのため、放置するとこれらがシラカンなどに代わって優勢になり、本来この地域にあるべき常緑樹林とはかけ離れた姿になってしまうおそれがあります。

エリア(p6-7)ごとの常緑樹の除伐の目安

- × すべて除去、▲ 少しあってもよい、● 適度に残す
- \* 外来または植栽由来の可能性が高い樹種。

樹種	A	B	C	D
クスノキ*	×	×	×	×
ユズリハ*	×	×	×	×
トウネズミモチ*	×	×	×	×
カクレミノ*	×	×	×	×
クワガサモチ*	×	×	×	×
モッコク*	×	×	×	×
シュロ*	×	×	×	×
チャノキ*	×	×	×	×
ナブシロダマ*	×	×	×	×
トベナ*	×	×	×	×
ヒイラギナンテン*	×	×	×	×

樹種	A	B	C	D
スダジイ*	×	×	×	▲
タブノキ*	×	×	×	▲
モチノキ*	×	×	×	▲
ヤブヅ*	×	×	×	▲
マサキ*	×	×	×	▲
ナンテン*	×	×	×	▲
マンリョウ*	×	×	×	▲
シラカン	×	×	▲	●
シロダモ	×	×	▲	●
ツバキ*	×	×	▲	●
アオキ*	×	×	▲	●
ネズミモチ	×	▲	▲	●
ヒサカキ	×	▲	▲	●
イヌツゲ	×	▲	▲	●

トウネズミモチは、生態系被害防止外来種リストに掲載されている外来種でもあり、緑地全域で伐採を実施しました。

武蔵台緑地では街路樹や庭木が逃げ出した常緑樹が増えています(→p16)が、高菜樹でも、イロハミズゴボシは植栽した個体から増えたと考えられます。このように国内に分布している植物であっても、武蔵野台地にもともと生育していなかった植物は、地域的な「外来植物」といえます。こうした植物が増えると、武蔵台緑地の本来の自然がどのようなものであったか、わからなくなってしまうので、極力取り除くことが望まれます。



ムサシアピ 海岸近くの常緑樹林に生息する植物。植栽個体から広がったとみられる。



マンリョウ 1980年代には緑地にはほとんどなかった。

多くの園芸植物は、林の中に植えても光不足で枯れてしましますが、中には広がって在来植物の生育環境を奪うものもあります。武蔵台緑地ではノハカタカラクサ(トキワツユクサ)、アメリカスミレサイシン、ハナニラ、ツルニチニチソウなどが注意すべき園芸植物です。これらは見つけしだい取り除きます。

景観を美化するつもりで、林縁や園路沿いに園芸植物が植えられることがありますが、これは新たな外来種を生む原因になるので、避けるべきです。種子ができず逸出しないもの(ヒガンバナ、アジサイ)であっても、林縁環境の保全(→p22)の観点から、樹林周辺への植栽は適切ではありません。



ノハカタカラクサ



アメリカスミレサイシン



ハナニラ

樹林に侵入するおそれがある園芸植物

多くの園芸植物は、林の中に植えても光不足で枯れてしましますが、中には広がって在来植物の生育環境を奪うものもあります。武蔵台緑地ではノハカタカラクサ(トキワツユクサ)、アメリカスミレサイシン、ハナニラ、ツルニチニチソウなどが注意すべき園芸植物です。これらは見つけしだい取り除きます。

景観を美化するつもりで、林縁や園路沿いに園芸植物が植えられることがありますが、これは新たな外来種を生む原因になるので、避けるべきです。種子ができず逸出しないもの(ヒガンバナ、アジサイ)であっても、林縁環境の保全(→p22)の観点から、樹林周辺への植栽は適切ではありません。

投棄された植木鉢の土に球根が入っていて、それが根付いている例もあります。

園芸植物は、見た目がきれいなものもあり、除去することに対して不満が出ることもあります。

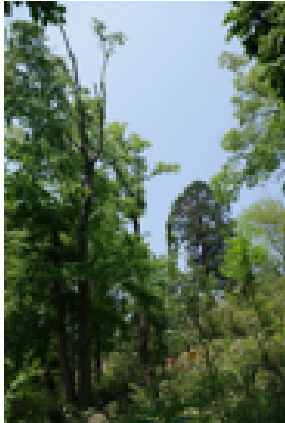
園芸植物の拡大を防ぐ必要性について、啓発・情報発信を強化していきます。

コナラやクヌギからなる雑木林は、15～20年程度の周期で伐採され、切り株から発生した萌芽（ひこばえ）を育てることで更新されてきました。しかし、木材を薪や炭などとして利用しなくなった現在、このような萌芽更新は行われなくなっています。公園の管理としても、一斉に大面積を伐採することは難しくなっています。そのため、武蔵台緑地では大径木が増え、次世代を担う若木が少ない状態になっています。

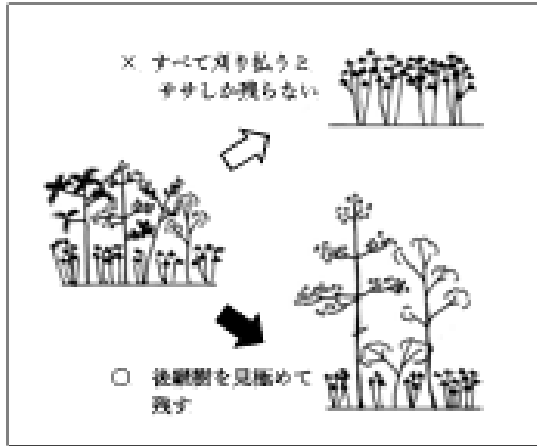
一方で、台風などで折れたり、老齢化して立ち枯れたりする樹木が多くなっており、樹木のない部分（林冠ギャップ）が目立つようになってきました。このような場所では、下層まで光が差し込むため、樹木の若木が育ちやすくなります。そこで、林冠ギャップを利用して、失われた樹木の後継樹を育てます。

コナラやクヌギからなる雑木林は、15～20年程度の周期で伐採され、切り株から発生した萌芽（ひこばえ）を育てることで更新されてきました。しかし、木材を薪や炭などとして利用しなくなった現在、このような萌芽更新は行われなくなっています。公園の管理としても、一斉に大面積を伐採することは難しくなっています。そのため、武蔵台緑地では大径木が増え、次世代を担う若木が少ない状態になっています。

一方で、台風などで折れたり、老齢化して立ち枯れたりする樹木が多くなっており、樹木のない部分（林冠ギャップ）が目立つようになってきました。このような場所では、下層まで光が差し込むため、樹木の若木が育ちやすくなります。そこで、林冠ギャップを利用して、失われた樹木の後継樹を育てます。



樹木の伐採によってできた林冠ギャップ



林冠ギャップでの後継樹の育成  
ギャップ形成の2～3年後から、少しずつ先駆樹種を除去し、目的の後継樹を育成する。

ギャップには、明るい場所では早く成長する樹種が成長します。クサギ、タラノキ、ゴズイ、アカメガシワなどがその例です。これらの先駆樹種が成長すると、ギャップは一時的に藪のようになりますが、これは傷口をよさく「かさぶた」のようなもので、むやみに刈り払うことは避けます。すべて刈り払ってしまうと、アズマネザサの繁茂を招き、かえって樹林の回復を困難にするおそれがあります。

ギャップで成長してきた樹木の中から、幹太、林冠に達する可能性がある高木性樹種の若木を選んで、それに光があたるように周囲の先駆樹種を除去します。どの樹種を選ぶかは、各エリアの目標種生（p8～13）を参考にしてください。

コナラやクヌギは、令和2年頃からナラ枯れ被害の拡大により、大径木の枯死が目立つようになりました。枯死した大径木は順次伐採を進めています。

現在は、伐採が進んだことにより、樹木の若木が育ちやすい状況に（結果として）なっています。今後は実生木を育てていくこととします。

ナラ枯れに伴う伐採については、情報発信が必要です。現地への掲出や内容の周知を行います。

V

## 7 落葉かきをする

林床の植物の生育には、光だけでなく落葉の堆積も大きな影響を与えています。毎年落葉が積み重なると、しだいに腐葉土ができていきます。雑木林や松林に生育する草本植物の多くは、種子が小さく芽生えも小さいため、落ち葉が積もった場所では生育しにくくなります。それに代わって鳥に運ばれるような大きな種子をもった常緑樹などが増えやすくなります。

そのため、林床植生を復元しようとする場合には、ササや下草の刈り取りによる光環境の改善に加えて、適度に落ち葉かきを行うことが有効です。落ち葉かきは、葉が落ちかけた12月から1月に、熊手をを用いて行います。雑木や下草が生えていると作業が難しいので、雑木の整理や下草刈りとセットで行うのがよいでしょう。

⚠️ 落ち葉かきは、エリアAおよびB1以外では、原則として必要ありません。とくに斜面では土壌の流出をまねくので行いません。

V

## 8 発生材の処理

かつての雑木林では、下草や落葉を肥料などの資源として利用していました。資源利用を前提としない樹林管理では、発生材は廃棄物として処分せざるを得ません。剪定枝や刈ったササや草、集めた落葉などは、分別して決められた場所に運びます。分別することによって、木材チップや堆肥として再利用できる場合があります。逆に分別しておかないと、処理費用が全計にかかることがあり、小枝やササの秆は、粗糞や糞に用いるなど、現地で活用も試みてみます。

集積時の分別 現地での利用例

木の枝	⇒ 粗糞（そだ）にして土留めなどに用いる
ササ類	⇒ 太めの秆を簡易的な柵や支柱に用いる
刈草	⇒ 雑草の繁茂を防ぐマルチングとして用いる（樹林外）
落葉	⇒ 花壇や畑用の堆肥をつくる（樹林外）

発生材の分別と利用例



落葉など発生材の集積例（都立浅間山公園）

集積時の分別

現地での利用例

木の枝	⇒ 粗糞（そだ）にして土留めなどに用いる
ササ類	⇒ 太めの秆を簡易的な柵や支柱に用いる
刈草	⇒ 雑草の繁茂を防ぐマルチングとして用いる（樹林外）
落葉	⇒ 花壇や畑用の堆肥をつくる（樹林外）

刈草や落葉は、緑地内でバイオネストを設置し、処理・活用しているところもあります。